

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 門脇陽子長老

開 会 招 詞 歴代誌16:34-36

* 賛 美 歌 7:1

父の神よ夜は去りて、新たなる朝となりぬ。我らは今御前みまえ いでに出て、御名みなをあがむ。

アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎とがをことごとく洗い、つみから清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 51:1, 2

1. 主にありてぞ われは生くる、われ主に、主われに ありてやすし。
2. 主にありてぞ われ死なばや、主にある死こそは いのちなれば。アーメン

共同の祈禱 7 カルケドン信条(キリストの二性一人格)

三位一体の第二位格である神の御子は、まことの永遠の神であり、み父と同質・同等でありなが

ら、時満ちて、人間の性質を、それに属するすべての固有の性質や共通の弱さと共にとられ、しかも罪はなかった。彼は、聖霊の力により、処女マリアの胎に彼女の本質をとって身ごもられた。

そこで、二つの十全で区別された性質、すなわち、神性と人性とが、変換・合成・混合することなく、一つの人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。

(ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年)

献 金 (黒) 教会活動・(赤) 研修所 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 詩編86編11-13節(旧約 p.923)

コロサイの信徒への手紙1章9-14節(新約 p.368)

説教・祈祷 「祈りの勘所」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 48:1, 2

1.主よ、おわりまで 仕えまつらん、みそばはなれず おらせたまえ。

世のたたかいは はげしくとも、御旗のもとに おらせたまえ。

2.主よ、今ここに ちかいを立て、しもべとなりて つかえまつる。

世にあるかぎり このところをつねにかかわらず もたせたまえ。アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にましますわれの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 67

主イエスのめぐみよ、ちちのあいよ、みたまのちからよ、あみさかえよ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 雨宮信長老(司会・受付 次週：古澤兵庫長老)

本日 受付 1階：佐藤紀子・加藤良明執事 2階：古澤迪子執事 / ZOOMホスト・録音：
森永翔馬

次週 受付 1階：藤井牧子・那珂信之執事 2階：星野房子執事 / ZOOMホスト・録音：
大日南信也

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ1：9-14「祈りの勸所」

祈るパウロ

今日の説教題は「祈りの勸所」と付けました。祈りにもいろいろとあります。そして、祈りは自由なものです。こういった祈りしかしてはいけない、ということはありません。それでもやはり、私たちを支える祈り、私たちを生かす祈りとして、こういう祈りがよいのでは、というものはあります。それがおそらく今日の所でパウロが祈ってくれている祈りです。そしてそれは、私たちを巻き込んでいく祈りです。最初に「こういうわけで、そのことを聞いたときから」とあります。どういうわけかと言いますと、その前が問題になっているのです。パウロの所により知らせが届いたのです。奉仕者仲間のエパfrasがパウロにより知らせをもたらしたのです。それは具体的には、先週読みました4節にあることです。「あなたがたがキリスト・イエスにおいて持っている信仰と、すべての聖なるものたちに対して抱いている愛について、聞いたからです」とあります。

信仰と愛

すでに前回このところを読みましたから、あまりくどくどとお話しする必要はないかもしれません。ただ、これだけということをお願いします。それは、この信仰にしましても、愛にしましても、キリストにおいて、と前置きされていることです。キリスト・イエスと言っています。イエス様のキリストとしてのお働き、私たちの罪を覆ってくださって、神様と結びつけて下さっている、それがすでに実現していると信じられる、という意味での信仰です。そして、そのようなことがわかってくる中で、同じようにして、神様の民となった人たちに対する愛、それもかなり具体的な愛を持つようになっている、そのことを知ったということです。ところで、私たちは、特に最近はそうかもしれませんが、ご近所づきあいが薄くなっているように感じます。隣に住んでおられる方のことを良く知らなかったりします。あるいは、職場などでも、世代が違くと、立場が違くと、どうも感覚が違うようだ、考え方が違うようだ、といったことを日々体験します。その点、教会というのは不思議なところ。教会ではあらゆる年代、色々な立場の男女が一つに集まっています。教会がなければ、知り合うこともなかった人同士が、まるで家族であるように、あるいは、家族以上に、お互いのことを心配したり、喜んだりすることができるのが教会です。教会が教会であるということはすでにそこで、イエス様の愛のお働きが始まっているということです。そしてパウロはこのことを知ったので感謝しているのです。そして、ただ感謝しているのではなく、ここでは、更に素晴らしい教会になるようにとりなしの祈りを始めているのです。

霊、知恵、理解

その祈りで最初に言われているのが霊です。言うまでもなく聖霊なる神さまのことです。キリスト者ならだれであれ、信仰を告白し洗礼を受けました時に、この霊のお働きにあずかります。パウロはこのところで、かなり具体的に、信じた人の中で何が起きていくのかを語っています。その肝になるのが、この霊のお働きです。霊が私たちの心に語り掛けていくということです。ただ語りかけるだけではないのです。あらゆる知恵と理解とあります。これは決して、哲学的な言葉ではありません。むしろ、この所で言う「知恵」とは箴言で言われているような、神様の御心に一致して、具体的な生活の中で物事を正しく判断していくような意味での「知恵」です。もっと言えば、これをしたら、これを言ったらどうなるか、がわかるという意味での「知恵」です。その点で私自身いろいろと反省するところがありますけれども、私たちはどちらかと言いますと、自分の言いたいことをぱつと言ってしまうことが多いのかもしれませんが、それでもそこで、いやいや、待てよ、と気づく、これを言ったら、この人、気を悪くするかな、と思いいたる、そんなような意味での知恵です。それも、わたしたちが人なれして、人付き合いの達人になって、というのではなく、むしろ、私の中で、こうだよ、と霊が語り掛けてくれるということです。私たちの行動、人とのかかわり方に神様が入り込んでくるのです。

主に喜ばれる歩み－祈りにおいて

そしてそのような生き方はそのまま、神様に喜ばれる歩みになっていく、というのが10節で言われていることです。「すべての点で主に喜ばれるように主に従って歩み」とあります。これは何も、私たち

のすることなすことが、いつでも、この通りになる、ということではないでしょう。なぜなら私たちは、罪のあるものであり、不完全なものだからです。しかし、ここで大切なのは、この言葉は、パウロのとりなしの祈りであるということです。パウロが、いわば自分の霊的な子どもたちに対して、このように歩むようになってほしいと、祈っているのです。しかも、話はそれで終わらないのです。信仰の先輩によって祈られる、ということは、祈られているもの達も、その祈りに巻き込まれていくことになるのです。なぜなら、神様は、祈りを聞かれる方だからです。もっと言えば、これも先週もお話したことです。パウロは、コロサイの人たちをキリストに結ばれている忠実な兄弟たち、といったのです。そこで大切なのは「キリストに結ばれている」というところです。私たちが祈るのは、当然ですけれども、独り言ではないのです。祈りを聞いてくださる方がいるのです。イエス様が、そして神様が私たちの祈りを聞いてくださっているのです。その同じ神さまが、祈られている人の中で働いているというのが今日の話なのです。わたしたちが教会において祈る、というのも全く同じことです。わたしたちが祈禱会で誰かを覚えて祈る時に、それは空しくないのです。祈った言葉が働きだすのです。祈りを聞いた人の中で、また、そこに居なくても祈ってもらった人の中で働くのです。

実を結ぶ

この10節であらゆる良い業をおこなって、とありますのは、もちろん、そのような祈りから生まれてくる、具体的な生き方にあらわれる愛の行為、誰かを訪問したり、話し相手になったり、困難な中にある人に対して、具体的な助けになりそうなことを考えて実行したり、といったことが意識されているのは間違いありません。しかし、それは祈りから離れているのではないのです。奉仕は奉仕、祈りは祈り、ではなくて、祈りのなかで、すなわち、神様の御心を訪ねる、何が神様に喜ばれるかを尋ねた中で示されたことを、実際に行っていく、という順番になるのです。この点では、私自身、まだまだ、祈りと普段の活動が、有機的に結びつくところまで行っていないなあと感じます。しかし、それは仕方ないかもしれないのです。なぜなら、私たちは最初から完全な者ではないからです。むしろ、神様から遠いものであったところから始めて、祈りつつ生きていく中で、神様に近いものとなっていくのです。それが、10節の最後の所にあります「神をますます深く知る」という言葉の意味です。私たちは、具体的な生き方の中で、祈りに導かれて、人に対して何かをすることで、ますます深く神様を知るものとされていく、という見通しが語られているのです。

力から力へ

そして、このような私たちの具体的な生き方の中に、神様の力がずっと働いていく、というのが、その次の11節で言われていることです。「神の栄光の力に従い、あらゆる力によって強められ」とあります。このところを新改訳聖書は「また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて」と訳しています。栄光ですから当然神様の業です。神様の業に圧倒的な権能があります。それはすべてを変えてしまうような権能です。その力が、私たちに働きかけて、そして、私たちの状況を変えていってしまう、とこのところは言うのです。そうして、私たちは、神様のされる業に参加していくのです。しかし、その一方で、ここでは少々気になる言葉があります。それは、「どんなことも、根気強く耐え忍ぶように」という言葉です。この言葉の意味は様々に解釈できるかもしれませんが。例えばこの手紙においてパウロは囚われの身でした。迫害もありました。そのような中で忍耐して、ということが意味されている可能性は十分にありますが、実際の所私たちもまた、キリスト者として、宗教者として誤解を受けることはあります。

根気強く取り組む

ところでこの「忍耐強く耐え忍ぶ」というところを新しい協会共同訳聖書では「何事にも忍耐と寛容を尽くすように」と訳しています。簡単にあきらめないのです。私たちは、このあきらめない、ということが意外と苦手なのかもしれません。とりわけ、対人関係においてそうではないでしょうか。とっても具体的なことですが、例えば、誰かを教会に導こうと考えた場合でも、少し痛い目にあいますと、ああ、もう仕方がない、今は時ではなかったとばかりにあきらめてしまう、ということになりがちです。あるいは、職場で苦手な人がいたとしますと、もう仕方がない、あの人はあの人だ、というよ

うに、最初からあきらめてしまうことがあります。この点では私も全くダメな口でして、偉そうなことは言えないのですが、しかし、確かなこととして、ここでは、そのような私たちに、一步も引かない忍耐強さ、誰かに嫌なことを言われてもめげない、寛容さ、簡単に怒ってしまって、すべてを投げ出すのではない粘り強さ、それが神様からから与えられているのだから、それに信頼してほしい、と祈られているのです。そして、そのような忍耐の先に新しい発見があって、喜びが待っているともいうのです。11節の最後はちょっと尻切れトンボのように見えます。「喜びをもって」で終わります。喜びをもって、何をするのか、と言いますと、この後に続きます、事実を確認するのです。事実をかみしめるのです。

根拠としての十分さ

実は今日の所は、9-11節が一つのまとまりです。そして、12節から後は23節まで、私たちの身の上になにが起きているのかを告白していく言葉が連なっています。今日は、この所を丁寧にたどることはできません。ただ、この12-14節の中でカギになりそうな言葉をいくつか確かめてみます。その一つは、12節の「聖なるものたちの相続分に、あなたがたがあずかれるようにして下さった御父に感謝するように」、という言葉です。あなたたちはもう資格のあるものだ、聖なるものと言われる資格がある、というのです。その根拠は、次の13節で明らかです。これも読んでみます。「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下にうつしてくださいました」。決定的なことがもうすでに起きているのです。

決定的な立場

私たちは、以前と今で、立場が全く違うというのです。私たちが従う者がもう全く違っているというのです。以前は、闇の支配の中にあつたのです。そうとは全く気が付かなかつたとしても、そうだったのです。ところが、今は私たちは、イエス様のご支配の中にあるのです。神様がそのようにして下さったのです。先ほど忍耐と言いました。もし、一番の忍耐があるとすれば、まさに、以前支配していた闇の力の働きに私たちが立ち向かうことです。そしてそこであきらめないのです。あきらめる必要がないのです。たとえ嫌な目にあつても、笑顔を返せるのです。それが罪を赦されたものの生き方です。

祈りの箇所

そして何よりも、忘れてはいけないのは、私たちは、このような信仰の祈りに支えられていることです。また、そればかりではなく、このような信仰の祈りを自分でなすことができ、お互いになすことができるのです。互いが神様のものとされていることを喜び合い、止まることの無い感謝ととりなしの祈りを互いに祈ることができるのです。

祈り

父なる神様。あなたは全くの御心から私たちを、キリストにおいてご自分のものとしてくださいましたから感謝します。私たちは、今すでに、闇から光の中に入つて、あなたのご栄光を映しながら歩むものとされていますから感謝します。このようなあなたにある身分を喜び、また、互いに祈りつつ、この世において、み心を現しつつ歩むことができますように、この週も助けていてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。